

わになるシートの結果と考察

— 関西医科大学総合医療センター分教室の分析 —

関西医科大学総合医療センター分教室
大阪精神医療センター分教室

1 はじめに

本校は6つの部署（本校・訪問教育部と4つの分教室）からなる病弱支援学校である。大阪精神医療センター分教室（以下、精神分教室）では、平成29年度より国立特別支援教育総合研究所に協力研究校として参加し、「Co-MaMe（連続性のある多層的階層支援）」を改編した『わになるシート』（支援者が輪になって児童生徒を支えるイメージで名付けられている。以下、Wシート）を使用している。Wシートは「Co-MaMe」に定められた自立活動の6観点に基づき、学習、生活、身のまわり、身体、社会、心に分けられており、37の質問から構成されている。精神分教室では、令和元年よりこのシートを使い、教員と児童生徒との面談で質問することで、児童生徒の強み、弱みを見つけ実態把握を行っている。

精神分教室に在籍する児童生徒の特徴として、自閉症スペクトラム症、ADHD、不登校、知的障がい等の精神疾患の生徒が多く在籍している。前籍校では不登校だった生徒も多い。

関西医科大学総合医療センター分教室（以下、滝井分教室）は、起立性調節障がいと摂食障がいの治療のため入院している児童生徒がほとんどであるが、発達障がいや自閉スペクトラム症を有する児童生徒も在籍している。「おとなしい」「静か」な児童生徒が多く自分のことを表現することが苦手な児童生徒が多いのも特徴である。精神分教室、滝井分教室ともに心身症や精神疾患の児童生徒が在籍している点で共通している。

昨年令和4年度、精神分教室では中学部19名、滝井分教室では中学部26名の生徒を対象にWシートを試行した。以下の図1の結果をもとに、本レポートでは二つの分教室で得られたWシートの結果を比較し、それぞれの分教室の生徒の強み、弱みの傾向を分析したい。

2 滝井分教室での活用

精神分教室では、平成30年度から担任と児童生徒の定期的な面談でWシートを使っている。生徒の入院期間は2～3か月の生徒が多く、分教室通学開始後1ヶ月ほど経ち教員と生徒の関係性が構築された時に実施している。

これまでWシートは本校では精神分教室でのみ使われていた。Wシートは精神疾患や心身症の児童生徒を対象とした教育的支援のために作られたツールであるため、精神分教室だけでなく、心身症や精神疾患の児童生徒が在籍している滝井分教室でも実態把握として有用ではないかと考え、令和4年度に滝井分教室で中学生への試行を考えた。その結果、滝井分教室では生徒の入院期間は1ヶ月程度と短いため、入院期間中に1度Wシートを使い、アンケートに答える形式や教員との面談の形式で生徒に各項目に当てはまる数値を答えてもらうことにした。また、滝井分教室では、中学生の在籍が多いため中学生のみに実施することにした。

I 実践報告

(図 1)

Co-NoMe項目	6観点	わになるシート 質問項目	R4精神	R4滝井	
聞き取り・理解力	がくしゅう	1 先生の言っていることや指示がわかります。	4.63	4.69	
写し	がくしゅう	2 黒板をノートに写すことができます。	4.47	4.50	
注意・集中	がくしゅう	3 授業を、45分間、座って受けることができます。	4.53	4.58	
学習への意識	がくしゅう	4 苦手な教科でもがんばろうと思っています。	4.05	4.23	
見通し	せいかつ	1 学校の連絡や、人の話を聞くことができます。	4.32	4.38	
	せいかつ	2 見通しを持って計画的に行動ができます。(何をしたらいいのかわかります)	3.58	3.58	
	せいかつ	3 予定が変更されても平気です。	3.68	3.85	
物の管理	せいかつ	4 わず 忘れ物をしません。	3.00	2.92	
	せいかつ	5 物の物をなくすことはありません。	3.32	2.88	
	せいかつ	6 片付けができます。	3.37	3.42	
	せいかつ	7 学校の相談室や保健室をつかうことができます。	4.05	3.42	
	せいかつ	8 家には自分にとっての安心できる場所があります。	3.95	4.04	
生活リズム	みのまわり	1 朝、学校に間に合うように起きることができます。	3.74	4.00	
睡眠	みのまわり	2 睡眠をとっています。	3.84	4.27	
食事	みのまわり	3 食事は三食とっています。	4.16	4.19	
	みのまわり	4 身だしなみ(洗顔・歯みがき・入浴・洗髪など)に気をつけられます。	4.00	4.42	
心の支え	みのまわり	5 気持ちの支えになる存在や物があります。()	3.89	4.12	
巧緻性	からだ	1 手先が器用です。	3.58	2.92	
動作	からだ	2 テキパキと行動ができます。	3.58	2.85	
運動	からだ	3 運動が好きです。	4.32	2.92	
感覚過敏	からだ	4 匂いが気になって、困ったりつらくなったりすることがあります。	3.89	3.31	
	からだ	5 音や声の気になって、困ったりつらくなったりすることがあります。	2.84	3.00	
	からだ	6 光(明るさやまぶしさ)が気になって、困ったりつらくなったりすることがあります。	3.58	3.23	
	からだ	7 物や服の感触気になって、困ったりつらくなったりすることがあります。	4.00	3.56	
集団活動	しゃかい	1 みんなといっしょに勉強したり遊んだりできます。	4.42	4.12	
同年代との関係	しゃかい	2 友だちとけんかや言い合いをしません。	3.63	4.15	
異性との関係	しゃかい	3 異性の友だち(男子は女子、女子は男子)とルールを守って仲良くできます。	4.26	4.15	
他者への信頼	しゃかい	4 困ったときに話せる友だちがいます。	3.84	3.68	
他者への相談	しゃかい	5 困ったときに話せる先生がいます。	4.11	3.62	
他者理解	しゃかい	6 表情や態度を見て、相手の気持ちがわかります。	4.05	4.15	
不安・悩み	こころ	1 不安や悩みがあります。	2.63	2.69	
感情のコントロール	こころ	2 自分の気持ちをコントロールすることができます。(イライラしても気持ちをおさえられます)	3.53	3.19	
こだわり	こころ	3 気になることがあっても、気持ちを切りかえてやるべきことができます。	3.32	3.31	
意欲・気力	こころ	4 がんばろうと思う気持ちがあります。	4.11	4.04	
気分の変動	こころ	5 少しのことでテンションが上がったり、下がったりすることはなく、落ち着くことができます。	2.95	3.08	
自信	こころ	6 自分のことを大切に思います。または、自信を持てることができます。	2.89	2.88	
人への情愛	こころ	7 他(ひと)の人のことを大切に思います。	4.00	4.31	
			平均	3.79	3.69

I 実践報告

3 『わになるシート』の分析

(1)各項目の分析

昨年度、滝井分教室と精神分教室で実施したWシートのデータから、数値として顕著に表れている項目について分析を行った。なお、尺度は5段階、5が肯定的評価、1が否定的評価である。数値は各項目の平均値を表記している。

①観点「がくしゅう」

滝井分教室の方が精神分教室より高い数値であるが、全ての質問項目で4以上、どちらの生徒も学習に対して意欲が高いことがうかがえる。滝井分教室は不登校状態での入院がほとんどで入院しながら生活リズムを整えることを目的としている。「入院中に勉強して定期試験を頑張って受けたい」と入院時に意欲を語る生徒もいる。これは不登校傾向であった生活をリセットして、「学びなおそう」という思いがあるからだと推察される。

②観点「せいかつ」質問項目「物をなくすことはありません」

この項目では、精神分教室の方が滝井分教室より高い。滝井分教室の生徒は物の管理をより苦手を感じていることがうかがえる。発達障がいや精神疾患の生徒が多くいる精神分教室の生徒の方が身の回りの物の管理により不安を抱いているのではないかと予想していたが、滝井分教室の生徒は、不登校で学校生活を過ごせていないことから自己肯定感が低く、「自分はやらない」と思い込んでいる傾向があるのではないかと考えられる。

③観点「みのまわり」質問項目「睡眠をとっています」

この項目については、滝井分教室の方が精神分教室より高い。これについては睡眠障害を伴う起立性調節障がいの児童生徒が入院している滝井分教室の方が数値は低いとみるのが自然であるが、入院中に「生活リズムを整える」という入院時の目標に対する滝井分教室の児童生徒の意欲の表れではないかと考えた。また、生徒たちが入院と分教室への登校という経験を通して、生活リズムを整えることができるようになっている実感を表していると捉えることもできる。

④観点「みのまわり」質問項目「身だしなみ（洗顔・歯みがき・入浴・洗髪など）に気を付けられます」

この項目については、滝井分教室の方が精神分教室より高い数値であるが、どちらも4以上と高い。滝井分教室は生徒の病室は病棟5階、教室は3階にあり、院内を移動して登下校する必要がある。教室は外来診療エリアでもあること、また病室は小児科病棟ではなく成人病棟との混合病棟であり、大人の視線が常時ある。社会性がより求められ、身だしなみには一定気を付けなければならない環境下で生活することによるものだと推察される。

⑤観点「からだ」質問項目「手先が器用です」

この項目については、滝井分教室の方が精神分教室より低い。滝井分教室の生徒の方が手先を使うことを苦手と感じていると捉えられる。

⑥観点「からだ」質問項目「運動が好きです」

この項目では、精神分教室より滝井分教室の方が低い値である。滝井分教室の生徒は、本人の持つ疾患と不登校経験の長さによるものではないかと考えた。滝井分教室の生徒は起立性調節障がいのため睡眠リズムが崩れ、「自宅に籠もりがちになってしまった」と話

I 実践報告

す生徒が多い。運動の経験が少ない、体調不良のため運動することが減ってしまったという理由が考えられる。また、滝井分教室は教室が狭小であり、体育の授業は週1時間で限られた空間での活動が主であるため身体を動かす活動は少ない。精神分教室は体育の授業は週3コマ、昼休みには毎日身体を動かして遊ぶ「わにタイム」があり、身体を動かす機会が多いことも要因の一つである。

⑦観点「しゃかい」質問項目「困ったときに話せる先生がいます」

この項目についても二つの分教室間で数値の隔たりが大きい。精神分教室の数値が高く滝井分教室の数値が低い。これまでの分析と同様、滝井分教室の児童生徒は不登校経験が長く学校の教員と話す機会に恵まれないことに一因があると考えられる。

⑧観点「こころ」質問項目「自分の気持ちをコントロールできます（イライラしても気持ちをおさえられます）」

この項目については滝井分教室より精神分教室の値の方が高い。精神分教室の児童生徒は発達特性などから気持ちをコントロールすることに課題がある生徒が多く、気持ちのコントロールが困難な生徒が多いのではないかと想定していたが結果は逆であった。滝井分教室の生徒は長期間自宅で籠っている生徒の割合が多く学校や社会から遮断され、家庭内で過ごすことが多いため、社会参加体験の少ないことが理由であると思われる。

(2) 滝井分教室の特徴

以上、Wシートの滝井分教室と精神分教室の比較を行ってきた。このアセスメントを通して、分教室間の特徴をある程度明らかにすることができた。Wシート全体の結果を通して見ると、滝井分教室の生徒は図1によると、次の通り特徴が見えてきた。

- ①物の管理、手の巧緻性、運動、動作、感覚過敏の項目において比較的低い数値となっている。これらの結果から、滝井分教室の生徒には発達の特性に課題があることがわかる。このような生徒たちの実態に合わせて、発達の特性や苦手感に配慮した指導、学習環境の設定を考える必要がある。
- ②精神分教室と比較すると、滝井分教室の生徒は他者への相談の数値が比較的低い。今後、教員と生徒との面談でWシートを活用しながら、生徒の援助要請やコミュニケーション能力を育てていくことも今後の課題としたい。
- ③生活、身の回りの項目では高い数値が表れている。この結果の背景には、病棟での規則正しい生活の実践、治療の一環としての分教室への登校、学習が考えられる。引き続き、分教室と医療スタッフとの連携を大切にしていきたい。

このようなアンケートの形式では、自己肯定感や自尊心の低い生徒は「自分はできない」と思い、低い数値を回答することも想定され、生徒の実態が反映されない場合も考えられる。分教室（院内学級）の役割は、入院中の児童生徒の自己肯定感を向上させることである。

Wシートの活用によって得られた結果をもとに、低値項目は生徒の持っている課題や弱みと捉え、滝井分教室の児童生徒への日々の具体的な支援に繋げていけるように努めていきたい。精神分教室と滝井分教室では在籍期間や生徒の実態が異なるが、今回、精神分教室以外の分教室の生徒にもWシートが使用できることがわかった。

I 実践報告

4 さいごに

滝井分教室で学んだ起立性調節障がいの高中生 1 人にインタビューを試みたことがある。その生徒は不調の時、「中学校では早退させてくださいと言うには勇気がいる。院内学級は病棟に帰らせてくださいと言いやすいので学習することができた」と語っていた。教員と児童生徒の距離感の近さゆえに、互いの関係性が深まりやすく、分教室（院内学級）での環境が生徒の学びなおしを支えていることが今回の分析とインタビューを通して分かった。

滝井分教室の生徒の主治医は「分教室で毎日学習した児童生徒は予後が良い。地域校に復学しやすく通信制や定時制高校、専修学校など様々な高等教育機関に進学するなどしている」と話していた。分教室での学習が児童生徒の進路や生き方を支えている。今回の分析では W シートを実施した生徒数は少なく調査時期にも幅がある。また、W シートの実施はそれぞれの担任教員が個別に対応しているため、質問者が同じではないので数値の客観性には限界があることは今後の課題である。次年度以降も W シートによる検証を続けて、児童生徒への支援に活かしていきたい。